

人文会 ニュース

jimbunkai news

August 2021

NO. 138

1 代表幹事挨拶

片桐幹夫

2 15分で読む

ジャック・ラカン生誕120周年によせて

松本卓也

18 書店現場から

置いてある本「が」売れる

小林えみ

23 図書館レポート

可能性の持久力

——「新しい図書館」たろうとする

せんだいメディアテークの20年目

小川直人

34 編集者が語るこの叢書・このシリーズ②

一冊の武器の向こうに

楠本龍一

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告



www.jimbunkai.com

読むなよ、絶対に読むなよ! /

言語学 バーリ・トゥード

Round 1

Allは「絶対に押すなよ」を理解できるか

川添 愛



日常にある言語学の話
題を、ユーモアあふれる
巧みな文章で綴る。
著者の新たな境地、抱
腹絶倒必至!

〈東京大学出版会創立
70周年記念出版〉

1870円(税込)

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<http://www.utp.or.jp/>

創元社

シリーズ既刊

世界を変えた
歴史を変えた
50人の女性科学者たち
50人の女性アスリートたち

▼A4判変型・上製・128頁/定価1980円
R・イグノトフスキー「著」野中モモ「訳」
50人の女性アスリートたち

社会を変えた

差別と闘い、後進に道を拓いた女性たちを
イラストで紹介する人気シリーズ第3弾!

各巻

定価1980円

大阪市中央区淡路町4-3-6〈税込〉

TEL06-6231-9010 Fax06-6233-3111

千代田区神田神保町1-2 TEL03-6811-0662

高齢者 うつを治す

上田 諭〔著〕
(戸田中央総合病院)

「身体性」の病に薬は不可欠

高齢者の病気は治りにくいなどの誤
解を正し、言いようのない心身のつ
らさをもたらす身体性のうつへの治
療論を提案する。 ■1760円(税込)



生きるための 安楽死

オランダ・
「よき死」の現在

シャボットあかね〔著〕

安楽死は死にたい人が選ぶもの?
年間6000人以上が安楽死で
亡くなるオランダの人々の生きかた、
そして最期の迎えかた。 ■2200円(税込)



日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL: 03-3987-8621 <https://nippon.co.jp>

東京の生活史

一五〇人が語り、一五〇人が聞いた、
東京の人生

岸政彦 編集

(8月23日発売予定) 定価4620円

1216頁に詰め込まれた150万字の生活史の海。一般
公募の聞き手150人による、いまを生きるひとびとの膨
大な語りを一冊に収録する、かつてないスケールで編まれた
インタビュー集。(担当編集者による制作日誌を筑摩書房HPにて公開中)

筑摩書房

営業部 03-5687-2680

*定価は10%税込です。

<https://www.chikumashobo.co.jp/>

代表幹事挨拶

みずず書房 片桐幹夫

2021年5月21日に行われた人文会年次総会において、代表幹事を拝命しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。他の幹事人事として、書記幹事・水口大介氏(創元社)、会計幹事・片山伸治氏(吉川弘文館)が新任、春秋社の吉岡聡氏が〈販売・企画〉委員会委員長、青土社の森卓巳氏が〈調査・研修〉委員会委員長として新任、白水社の岩野忠昭氏は〈広報〉委員会委員長として再任となり、この6名の幹事で1年間会の運営を担うこととなります。また、各委員会の副委員長として、〈販売・企画〉委員会副委員長に段塚省吾氏(紀伊國屋書店)、〈調査・研修〉委員会副委員長に澤畑壘氏(東京大学出版会)が共に新任、〈広報〉委員会副委員長に乙子智氏(慶應義塾大学出版会)が再任されました。喜ばしいこととして、日本評論社が復会されましたが、残念ながら御茶の水書房が退会されましたことをご報告いたします。

出版業界の低迷は、それぞれの現場を疲弊させており、さらにこのコロナ禍が大きな打撃を与えています。その中であって人文会は、これまでの施策の一つ一つに確かな手応えを感じております。今後も、業界の皆様と手を取り合って、様々な課題を乗り越えていくことが可能であると確信しています。

人文会は今年53年目を迎えました。諸先輩方の意志を継承しつつ、新たな施策にも積極的に取り組む所存です。本年も、幹事、各委員へのご指導・ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

ジャック・ラカン生誕120周年によせて

松本 卓也 (精神科医)

1 はじめに

本年(2021年)は、フランスの精神分析家ジャック
II マリII エミール・ラカン(1901-81)の生誕120
周年かつ没後40周年にあたる。ラカンがフロイトの生
誕100周年にあたって述べた「生誕百年を祝うのは
貴重である。生誕百年によって、作品を通してその人が
生き延びているのだと思わせるような連続性が想定され
る^{*}」という言葉に鑑みるならば、本国フランスにおいて
現在でもラカン派の理論と臨床が一定のプレゼンスを保
ちつづけ、そしてここ日本においてもラカンに関する論
文や書籍が定期的に刊行されているという事実は、まさ

に彼が「生き延びている」ことの証左であると言えるだ
ろう。

本稿では、ラカンの生涯と仕事を手短にたどることを
試みたい。また、注においては特に日本における近年
(およそ2010年代以降)の研究・出版状況の一部にも触れ
ささやかな読書案内としても利用できるような心がけたつ
もりである。なお、昨今の出版状況の影響からか、最近
の書籍であっても早々と版元品切れとなっている場合も
あるため、入手の際には注意されたい。

2 精神医学から精神分析へ

ラカンは、1901年4月13日に3人きょうだいの

長男としてパリに生まれ、パリ大学医学部を卒業した後、サンタンヌ病院のアンリ・クロード教授に師事している。クロードは、当時のフランス精神医学ではまだ周縁的な存在であった精神分析に対して寛容な態度を示しており、ラカンをはじめとする同時代の研修医たち——器質力動論で知られるアンリ・エーや後に精神医学史家となるアンリ・エランベルジェもそこに含まれる——は比較的自由に同時代のさまざまな潮流に触れることができた世代である。このような研修体制のなかで、ラカンは神経学や精神医学の研鑽を積み、フロイトにも興味をもつとともに、「精神自動症」で知られるパリ警視庁精神障害者特別医療院長ガエタン・ガティアン・ドゥ・クレラノン^{＊4}にも師事することができたのである。

1932年に、ラカンは博士論文『人格との関係からみたパラノイア性精神病』^{＊5}を提出し医学博士となる。この博士論文は、パラノイアの疾病論的位置づけをめぐって生じていた論争である「パラノイア問題」を扱うものであり、ラカンはこの論文のなかでドイツ、フランス、イタリアのパラノイア研究の総括を行い、そこにフロイトの葛藤をめぐる議論を導入することによって、パ

ラノイア問題に一石を投じようとしていた。つまり、この時点でのラカンは、精神分析に多少の興味をもつ精神医学（日本の文脈では「精神病理学」と呼んでも差し支えないだろう）の専門家だったのである。この博士論文ははやくに邦訳されているが、残念ながら現在では入手困難である。代わりに、その症例部分の抜粋と初期論文を含む論集『二人であることの病い』^{＊6}は講談社学術文庫から現在でも入手可能であり、この論集にはシュルレアリスムに強い関心を示していた時期のラカンの文章も収められている^{＊7}。

当時のフランスにおける精神分析の状況について言えば、1910年代にアンジェロ・エスナールによる紹介・翻訳がなされ、はやくも1914年にはエマニエル・レジとの共著の形で『神経症と精神病の精神分析——その医学内外における応用』なる包括的な概説書が出版されている。また、フロイトの分析を受けたポランド人であるウジェニー・ソコルニツカが1920年に渡仏し、サンタンヌ病院のなかで若手精神科医に対して教育分析を始めていた。これらのメンバーおよびフロイトと親交のあったマリー・ボナバルトを中心として、

1926年にパリ精神分析協会(Société Psychanalytique de Paris: SPP)が設立され、国際精神分析協会(International Psychoanalytical Association: IPA)の支部として機能し始める。

ラカンと精神分析との本格的なかわりは、1932年からSPPの分析家であったルドルフ・レーヴェンシュタインとの教育分析を開始したときに始まる(ラカンは1934年に候補生となり、1936年には開業の分析臨床を開始している)。なお、レーヴェンシュタインは、ラカンがハインツ・ハルトマンやエルンスト・クリスとならべてしばしば揶揄している自我心理学派の分析家でもある^{*)}。この教育分析および「衝動からコンプレクスへ」と題された発表によって、ラカンはパリ精神分析協会から認定され、1938年に精神分析家の正会員(分析家であり、教育分析家でもあることを指す)として認められている。この発表のなかには、後のいわゆる「鏡像段階論」で展開される「寸断された身体」に関する議論が症例をもとになされており、彼の議論が単なる思弁ではなく症例の経験のなから生まれたものであることを明らかにしている。それと前後して、1936年の国際精神分析協会の大会では、子どもが鏡という外部に映る自己のイ

メージに同一化することによって身体の寸断化が克服されるとする「鏡像段階」についての最初の発表がなされ、その内容は1949年にあらためて論文文化されている。

1938年に精神分析家となり、毎週の講義であるセミナーを開講するまでのあいだのラカンの論文はそれほど多くはないが、よく知られた1945年の「論理的時間と先取りされた確実性の断言」のほかにも、精神分析経験を現象学の見地から記述することを試みた1936年の「〈現実原則〉の彼岸」、アンリ・エーとのあいだの論争となる1946年の「心的因果性についての提言」、一連の犯罪学や攻撃性をめぐる論文といった、後に主要論文集である『エクリ(Ecrits)』に収録される諸論文等がある。加えて、書籍化されていないが彼が心身医学にも興味をもっていたことを示す共著論文^{*)}もあり、非常にバラエティに富んだ研究がなされている時期であると言える。

3 パリ精神分析協会からフランス精神分析協会へ

1951年から、ラカンは後に「セミナー」と呼

ばれることになるフロイトのテキスト読解を主とする私的な通年講義を開始する(1953年に公開で行われるようになり、ラカンの死の前年まで継続された)。1953年1月に、ラカンはSPPの会長に選出されているが、同年6月には当時ラカンが行っていた変動時間セッション〔短時間セッション〕とも呼ばれ、分析の面接時間を標準的な50分ではなく毎回変化させる手法である。ラカンによれば、セッションの突然の終了は、分析主体の語りに句読点を打ち、その語りに分析主体が思ってもみなかったような意味を析出させることができる(とされる)がサシャ・ナシユトラを中心とするSPPのメンバーから問題視され、その結果として、ラカンは同協会から離れ、やはり分析家の養成や教育をめぐる問題でSPPから離反したダニエル・ラガーシュらと合流してフランス精神分析協会(Société Française de Psychanalyse: SFP)を設立することになる。このような経緯から、1950年代のラカンの論文には自我心理学やSPPの分析家たちに向けた非難が溢れることになり、当時の状況を知らない読者には読みにくいテキストが多数生まれることになった(主著『エクリ』の読みづらさの一部はここに由来している)。

1953年9月26、27日にローマ大学心理学研究所で開催されたSFPの初めての会議——すなわち、新たな協会の設立を記念して行われた会議——において、ラカンが自らの精神分析の理念を初めて公に示したマニフェストが、あの名高い「ローマ講演」(精神分析における話と言語活動の機能と領野)である。なお、精神分析への無理解によって塗りつぶされていた日本語訳『エクリ』のそれを大幅に改善した「ローマ講演」の新訳が刊行されている。また、「ローマ講演」は9月26日に行われたローマ大学で配布されたテキストであり、その際実際にラカンが行った講演は、このテキストの意味を明確にするためになされたものであった。なお、その講演そのものも、2001年の『他のエクリ (Autres écrits)』に「ローマのディスクール」として収載されている。

同じ1953年から、ラカンのセミナーはサンタノヌ病院で行われるようになり、SFPの若手や精神分析に興味をもつ研修医の教育の一角として機能するようになった。この時期のラカンが強調していたのは、神経症と精神病の鑑別診断である。^{*12} 当時、精神病を精神分析(ないし心理療法)で治療しうる、ないし治癒させたい

う報告が流行していたが、ラカンはそれらの報告は真の精神病を扱っているのではないと考え、言語の障害の有無に基づく鑑別診断の重要性を指摘した。また、この時期のラカンはマルティン・ハイデガールの哲学に惚れ込んでおり、自らが死に向かう存在であることを先駆的に覚悟した現存在が共同体の遺産を引き受けるのと同様に、分析の語りのなかで〈父の名〉によって支えられた歴史を引き受けることが重要視された。この時期のラカンの議論の要点は、さまざまな症状は想像界における誤認メコネサンスによって引き起こされており、その誤認を変動時間セッションを用いた時間の急ぎ立てや言語の要素への注目によって象徴界における承認ルコネサンスへと至らせるという点にあり、ラカンは同時代の精神分析家が想像界の事柄しか扱えていないことを論文やセミナーのなかで繰り返し批判している。さらに、クロード・レヴィ・ストロースの影響を受けながら、エディプスコンプレクスは構造主義的に改版されることになった。^{*13}ただし、このような議論は、主体の歴史があらかじめ〈父の名〉によって象徴的に決定されていることを想定させるものであり、実際にラカンはそのことをレヴィ・ストロースのゼロ象徴(ゼ

ロ記号)などの概念を用いて説明しているが、これは後にジャック・デリダが論文「真理の配達人」においてラカンを手厳しく批判するところとなった箇所でもある。^{*14}

4 パリ・フロイト学派

ラカンはその後もSFPの中心的なメンバーでありつづけた。しかし、ラカンはフロイトの設立したIPAに復帰し、自身のフロイト解釈こそが正統であることを英米圏の分析家たちに認めさせようとも考えており、SFPはIPAへの復帰の交渉をつづけていた。また、その他のSFPのメンバーもIPAへの復帰の道を模索しており、1959年の第21回IPA大会においてSFPはIPAへの加盟申請を行った。こうして、ロンドンの分析家であるピエール・トゥルケの指揮のもと、調査委員会が立ち上げられることになる。1961年にはSFPをIPAの監督下におき、ラカンとフランソワーズ・ドルトを周縁化することを提案する「エディンバラ勸告」が出される。さらに1963年には、ラカンの周辺の人物などからの聞き取りをもとに、いわゆ

る「トゥルケ報告」が作成される。この報告書のなかで、やはりラカンの変動時間セッションをはじめとする独自性が問題視され、SFPはIPAへの復帰を認められるかわりに1963年10月末までにラカンをSFPの教育分析家の名簿から除名すること(ラカンの言う「破門」が求められた。^{*15})その結果、1963年度のセミナー『「複数形の父の名」への序論』は11月20日の第1回目のセッションで中止されることになるのである。このセミナーは先述の〈父の名〉を単一の普遍的なものであるとする考えから、複数的なものと考ええるための足がかりとなるものであった。

「破門」の結果、1964年以降、セミナーは高等師範学校に場所を移して行われるようになった。その際にラカンに協力したのが、哲学者ルイ・アルチュセールである。アルチュセールは1963年に発表した論文「哲学と人文科学」において、アメリカ式の自我心理学において精神分析が自我の「再適応技術」へと貶められ、社会・政治における「安全装置」の役割を負わされていることを批判し、そのことを告発しえた稀有な存在としてラカンの名に触れている。それ以来、ラカンとア

ルチュセールのあいだのやりとりが生じ、セミナーが新しい場所で行われるようになったのである。また、セミナーは行われる場所が変化しただけでなく、内容面においてもかつてのフロイトのテクスト読解を主とするものから、『精神分析の基礎』(後に『精神分析の四基本概念』として刊行され、昨年岩波文庫の一冊として名実ともに「古典」の仲間入りを果たした重要なセミナーである)等をテーマとする、フロイト解釈に基づいたラカン独自の理論を伝達するものへと徐々に変化していった。こうして新しい場所と形式での理解者を獲得した彼は、当時流行していた構造主義の潮流に乗り、哲学や思想の領域でも広く受け容れ始める。なかでも、アルチュセールの弟子であったジャック・アラン・ミレールは、20歳でラカンのセミナーに初めて出席して以降、ラカンから高く評価されるようになった。ミレールは、当時の高等師範学校の仲間たちとともに雑誌『分析手帖(Cahiers pour l'Analyse)』を発行し、そのなかでアルチュセールと当時のラカンの理論を結びつける重要な議論を行っている。^{*17}

ラカンは、1964年6月に独自の学派であるパリ・フロイト派(Ecole Freudienne de Paris: EFP)を立ち上げ

る。そして、1966年にはラカンのそれまでの主要論文を集めた著作『エクリ』が刊行され、話題を集めている。この出版企画は、スイユ社の編集者フランソワ・ヴァールによって提案されたものであり、1936年から1965年までに発表されたテキスト、および同書の出版に際して新たに書き下ろされたテキスト、さらにはミレールによる体系的な索引等が含まれ、あわせて900頁以上にわたる長大な論文集となったが、フランスでは学術書としては異例のベストセラーとなり、文庫版もあわせて20万部以上が売れたという。

翌1967年に、ラカンは独自の精神分析家の資格制度を提案している。これは、EFPの会員のなかに、「学派会員分析家(Analyse Membre de l'École; AME)」と「学派分析家(Analyse de l'École; AE)」の2つの資格を設けること、および後者のAEの任命のための「パス」と呼ばれる手続きを定めようとするものである。AMEは、EFPにおけるいわゆるふつうの分析家のことを指し、つまりは(教育)分析を受け、自らも分析を実践している会員のことである。ここで注意しておかなければならないのは、ラカンが「教育分析家」という資格を撤

廃し、ひとはどんな分析家と分析を始めたとしても(つまり、「教育分析家」のもとで「教育分析」を行ったのでなかったとしても)分析家になることができる、とする改革を行ったことである。つまり、教育分析家とは、その分析家が新しい分析家を生み出したことによって事後的に与えられる呼び名にすぎないとされるのである。通常、IPAやその傘下にある精神分析の団体においては、精神分析家の候補生となるためには厳しい基準が課され、そこには往々にしてヒエラルキーや人脈に基づいた選別がなされがちである。ラカンが行おうとしたのは、そのようなヒエラルキーの撤廃である。その結果、他の学派ではありえないことであると思われるが、(候補生としての教育ではなく)治療を目的として始めた分析であったとしても、ひとはその分析をもとに分析家になれることが明確化される。さらに、AEとは、そのようにしてなされた自分の分析を通じて、現代において精神分析とは何かを学派に教えることができるような分析家であると思われる。そのAEを任命するためには、精神分析という個々の人々にとってそれぞれ異なる特異的な経験が、他者へと伝達されうるかどうか確かめられなければならない

らない。そのための装置が「パス」である(言い換えれば、しばしば日本では誤解されているのだが、「パス」を行わなくともAMEとなることは十分にできる。というよりもむしろ、AEとなることは例外的なのである)。「パス」において、候補者

である「パスサン」は、自分と同じくらい分析が進みつつある「パサー」2名に対して、自分の分析経験について、特にいかにして「分析家の欲望」を自分のものにしたのかについて伝え、それを聞き取った「パサー」が「パスサン」の経験を承認審査委員会に伝える、といういつけん奇妙な形式がとられる。このような「パス」の制度化を含むラカンの提案は、紆余曲折を経て——というのは、この提案は、ラカンについてきた古参の教育分析家たちにとっては、自分たちの権利を剥奪するものと思われたからである——1969年1月のEFP総会で採択されている。^{*18}

この「パス」の制度化と前後して、「5月革命」として知られる1968年5月のゼネストの際には、ラカンもセミナー(『精神分析的行為』)を中止しており、翌1969年度からのセミナーはバンテオンの法学部で行われるようになっていた。なお、1968年には

パリ第8大学に精神分析学部が設置され、ラカン派は大学制度内でも地盤を固めている(この学部の教員はほぼラカン派で占められ、現在も存続している)。

1970年代のラカンについては、精神分析の経験のみならず言語をつかってなされるさまざまな行為についての射程をもつ「4つのディスクール」の理論後に、「資本主義のディスクール」が付け加えられて、「4+1つのディスクール」となる)を提示した1969-70年の『精神分析の裏面』や、「性別化の式」として知られる、男性と女性の異なるロジックと享楽のあり方を理論化した1972-73年の『アンコール』^{*19}、そして作家ジェイムズ・ジョイスを題材に「ポロメオの結び目」の解けとその補填を論じた1975-76年の『サントーム』^{*20}がとりわけ言及される。特に、臨床的な観点から言えば、『サントーム』の時期において、ラカンは次第に神経症と精神病の鑑別診断という論点を以前よりも相対化している様子がうかがえ、むしろ両者の症状に共通する享楽の部分にアプローチする精神分析理論と技法を深めていったと考えられる。現代のラカン派で「症状の一般理論」や「サントームの臨床」と呼ばれているのは、その

ような前提に基づき、症状がもつ無意識的・言語学的な意味ではなく、むしろ症状がどのように使用されており、それをどのように変化させるかということを身体の水準に求める臨床であった。なお、最晩年のラカンはトポロジの理論に熱中するがやがて行き詰まり、1980年1月15日にパリ・フロイト派を解散する。その後、学派の主導権をめぐって激しい争いが勃発するが、翌81年1月19日にはミレールと彼の支持者たちによってフロイトの大義派が創設される。ラカンはそれを見届けたのち、同年9月9日に大腸がんのためパリに没した。

5 おわりに——現代ラカン派の動向

さて、1963年のSFPからのラカンの「破門」と、翌64年のセミネールの高等師範学校への移動は、先述の通り、当時アルチュセールの弟子であったミレールとラカンの出会いを生み出すことになった。ミレールは、後にラカンの娘ジュディットの夫かつラカンの遺産の法定相続人にもなるが、晩年までラカンの最側近として活躍し、ラカンの死後はフロイトの大義派(Ecole de la Cause

Freudienne: ECF)の中心人物となった。また彼は、ラカンのテクストの校訂者も務めており、『セミネール』(全26巻)の刊行のほか、2001年には『他のエクリ』を刊行している。^{*21}

ミレールの功績としては、「パス」——ラカンは晩年にこれが完全な失敗であったことを告白している——を生涯与えられる資格ではなく3年間の任期制とするこ
とによって「パス」を生産的なものとし、そしてAEとなつた分析家が学派の内外に向けて広く自分の分析経験を「証言」することを義務づけたことが特筆されよう(もっとも、ECFの周辺の人物からは、「パス」のなかでミレールの考えが再生産されているのではないか、という声も聞こえてこないわけではない)。また、精神分析における解釈を、意味を明らかにするような解釈ではなく、むしろ意味を削減していく「逆方向の解釈」によって、身体の出発事に接近していく技法として再定式化したこと、認知行動療法やエヴィデンス・ベースドな科学に基づく治療との戦いを組織したことなども彼の功績であろう。^{*23} さらにミレールは、1992年には世界精神分析協会(Association Mondiale de Psychanalyse: AMIP)を設立し、世界各国のラカ

ン派の連帯を組織している(なお、現在この協会はIPAに匹敵する数の精神分析家を擁するという)。さらに、児童を扱う施設での実践によって、ラカン派の実践の対象は自閉症にも広がっている。^{*24} また、最近ではジュディス・バトラーへの言及や、トランスジェンダーを取り上げるなど、新たな領域への意欲的な展開もうかがえる。^{*25}

なお、フランス国内ではミレールとは異なる立場をとるラカン派の団体も各種存在する。^{*26} SPPとSFPの分裂については先に触れたが、1964年にEFPが設立される直前にはダニエル・ラガーシュらを中心とするフランス精神分析団体(Association Psychanalytique de France: APF)との分裂があり、1968年には「パス」制度をめぐった分裂によって「第4グループ(Le Quatrième Groupe, Organisation Psychanalytique de Langue Française: OPLF)」が生まれている。EFPの解散後に関して言えば、ミレールの精神分析を担当し、2000年代までラカンの著作の出版権をめぐってミレールと法廷闘争を行ったシャルル・メルマンはECFとは別団体で活動し、現在は国際ラカン協会(Association Lacanienne Internationale: ALI)を組織している。ECFもまた、1998年のコ

レット・ソレールらとの分裂(それによって設立されたのがEcole de Psychanalyse des Forums du Champ Lacanien; EPPCLである)、2002年にはビエール・ブリュノやマリィジャン・ソレラを中心とした会員が「ジャック・ラカン精神分析協会(Association de Psychanalyse Jacques Lacan; APJL)」として独立し、このグループは現在「ラカンの賭け(Le Pari de Lacan)」として活動している。ここで触れた以外にもフランスのラカン派は数多くのグループに分裂して活動している。

なお、日本にも日本ラカン協会(2001年)および東京精神分析サークル(2007年)等のグループがあり、精力的に研究が進められているほか、ラカン派のオリエンテーションに基づいて精神分析を実践する臨床家もまだ少数ではあるが存在している。

注

* 1 Jacques Lacan, *Écrits*, Seuil, 1966, p. 459.

* 2 特に近年の優れた入門書としては、アラン・ヴァニエ「はじめのラカン精神分析——初心者と臨床家のために」(誠信書房、2013年)、向井雅明『ラカン入門』(ちくま学芸文庫、2016年)、片岡一竹『疾風怒濤精神分析入門——

ジャック・ラカンの生き方のスズメ(誠信書房、20017年)等がある。また、多少アメリカナイズされた形ではあるが、ブルース・フィンク『ラカン派精神分析入門——理論と技法』(誠信書房、20008年)と『精神分析技法の基礎——ラカン派臨床の実際』(誠信書房、20012年)は、ラカン派の臨床の一端を伝えてくれる書籍である。また、同著者には理論・読解編である『後期ラカン入門——ラカンの主体について』(人文書院、20013年)と『エクリ』を読む——文字に添って』(人文書院、20015年)もある。

*3 ラカンに関する伝記としては、エリザベト・ルディネスコ『ジャック・ラカン伝』(河出書房新社、20001年)があるが、同著に対して(抗して)書かれたNathalie Jaudelによる*La Légende noire de Jacques Lacan* (Navarin, 2014)の併読を勧める。フランスの精神分析史全般については、Elisabeth Rondinescoによる*La bataille de cent ans, histoire de la psychanalyse en France (1) : 1885-1939, (2) : 1925-1985* (Fayard, 1994)およびAmin de Milollaによる*La France et Freud, tome 1, 2* (Presses universitaires de France, 2012)等が参考になる。

*4 初期ラカンの神経精神科医としての仕事、およびエーとの論争については、2020年末に開催された日本ラカン協会の大合シンポジウム「ラカンとフランス精神医学」で集中的な議論がなされており、その模様は今秋に発刊予定の同協会の論集「I.R.S.——ジャック・ラカン研究」20(2021年)で読むことができるようになるはずである。

*5 ジャック・ラカン『人格との関係からみたパラノイア性精

神病』(朝日出版社、1987年)。同書で扱われているパラノイア論の背景となる文脈については、小木貞孝『フランスの妄想研究』(金剛出版、2021年にオンデマンド版が刊行されている)、濱田秀伯『ラクリモーサ 濱田秀伯著作選集』(群馬病院出版会、2005年)、およびポール・セリュー、ジョゼフ・カブグラ『理性狂——解釈妄想病と復権妄想病』(弘文堂、20018年)が参考になる。

*6 ジャック・ラカン『二人であることの病い——パラノイアと言語』(講談社学術文庫、20011年)。同文庫には晩年のラカンの精髓を伝える『テレヴィジョン』(講談社学術文庫、20016年)も収められている。

*7 先述の「I.R.S.——ジャック・ラカン研究」20(2021年)にも、ラカンとシュルレアリスムの関係について検討したワークシヨップ「非理性性、文学、精神分析——1930年代フランスの思索と実践」の内容が掲載される予定である。

*8 レーヴェンシュタインとラカンの関係については、十川幸司『精神分析への抵抗——ジャック・ラカンの経験と論理』(青土社、オンデマンド版が20012年に刊行されている)において野心的な検討がなされている。

*9 ダリアン・リリーダー、デイヴィッド・コーフィールド『本当のところ、なぜ人は病気になるのか?——身体と心の「わかりやすい」関係』(早川書房、20008年)に詳しい。ダリアン・リリーダーには精神分析における欲動と主体の分裂の問題を「手」を題材にして論じた『ハンズ——手の精神史』(左右社、2020年)もある。

* 10 牧瀬英幹『精神分析と描画——「誕生」と「死」をめぐる無意識の構造をとらえる』（誠信書房、2015年）は、描画療法において時間Ⅱ画用紙の句切りを積極的に活用する「描画連想法」を扱っている。

* 11 ジャック・ラカン『精神分析における話と言語活動の機能と領野——ローマ大学心理学研究所において行われたローマ会議での報告 1953年9月26日・27日』（弘文堂、2015年）。

* 12 松本卓也『人はみな妄想する——ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』（青土社、2015年）。

* 13 ラカンの構造主義的な議論を、柳田國男、折口信夫らの仕事と結びつけて論じた最近の研究書として、岡安裕介『言語伝承と無意識——精神分析としての民俗学』（洛北出版、2020年）がある。

* 14 ジャック・デリダ『精神分析の抵抗——フロイト、ラカン、フーコー』（青土社、2007年）および、守中高明『ジャック・デリダと精神分析——耳・秘密・灰そして主権』（岩波書店、2016年）などが参考になる。

* 15 「トゥルケ報告」をめぐる一連の動きについては、ニコラ・タジャン「Turquet報告、および精神分析運動におけるLacanの位置」『精神医学史研究』22（1）、18—23（2018年）が詳しく論じている。

* 16 ジャック・ラカン『精神分析の四基本概念（上・下）』（岩波文庫、2020年）。

* 17 『分析手帖』については、上野修・米虫正巳・近藤和敬編

『主体の論理・概念の倫理——二〇世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』（以文社、2017年）、およびニコラ・フルリー『現実界に向かって——ジャック・ラカン・ミール入門』（人文書院、2020年）が参考になる。

* 18 この時期のラカンにおける政治との関係については、上尾真道「ラカン 真理のパトス——1960年代フランス思想と精神分析」（人文書院、2017年）が詳しい。「パス」については、立木康介「ラカンの68年5月——精神分析の「政治の季節」、市田良彦・王寺賢太編『現代思想と政治——資本主義・精神分析・哲学』（平凡社、2016年）および（68年5月）にラカンは何を見たか」、王寺賢太・立木康介編（68年5月）と私たち——「現代思想と政治」の系譜学』（読書人、2019年）が詳しい。また、工藤頭太『精神分析の再発明——フロイトの神話、ラカンの闘争』（岩波書店、近刊）は、この周辺のテーマをフロイトからラカンの全キャリアを通じて検討した力作である。

* 19 ラカンと女性性というテーマに関しては、春木奈美子「現実的なものの欲待——分析的経験のためのパッサージュ」（創元社、2015年）、立木康介「女は不死である——ラカンと女たちの反哲学」（河出書房新社、2020年）が参考になる。精神分析史全体における女性論は、西見奈子編著『精神分析にとつて女とは何か』（福村出版、2020年）で網羅的に検討されている。

* 20 「サントーム」概念については、赤坂和哉「ラカン派精神分析の治療論——理論と実践の交点」（誠信書房、2011年）、

小林芳樹編訳『ラカン 患者との対話——症例ジェラルド、エディプスを超えて』(人文書院、2014年)のほか、河北秀也監修『ラカンの剰余享楽／サントーム(LIBRARY: nichiko No. 140)』(文化科学高等研究院出版局、2018年)の上尾真道論文、河野一紀論文が詳しい。

* 21 なお、生誕120周年に伴い、ラカンの遺稿の出版の企画も立ち上がっている模様である。

* 22 河野一紀「分析の終結はいかにしてもたらされるのか——フロイトの大義派でのパスの実践と理論的進展」、『R.S.——ジャック・ラカン研究』19、1666-1997(2020年)は、ひとつのパスの証言として、またラカン派の分析のありようを教えてくれる貴重な記録としても読める。

* 23 ミレールについては、前掲のニコラ・フルリーの著作が入門的な解説書である。また、久保田泰考『ニューロラカン——脳とフロイトの無意識のリアル』(誠信書房、2017年)は、精神分析と神経科学の関係を論じた珍しい書物である。

* 24 上尾真道・牧瀬英幹編著『発達障害の時代とラカン派精神分析——「開かれ」としての自閉をめぐって』(晃洋書房、2017年)には、ラカン派の自閉症臨床を紹介する池田真典「ベルギーのラカン派による施設での臨床について」のほか、多数のラカン派的自閉症論が収められている。河野一紀『ことばと知に基づいた臨床実践——ラカン派精神分析の展望』(創元社、2014年)もまた発達障害論を収めている。
* 25 その模様の一部は、YouTube上の「Lacan Web Télévision」などで見ることもできる。

* 26 ラカン派の分裂に関しては、次の論文が包括的な系統図を示しており参考になる。Yann Diemer, Schéma des scissions, *graphie de la passe et carte de la dispersion. Esprit*, 28: 99-111, 2012.

松本卓也

1983年高知県生まれ。高知大学医学部卒業、自治医科大学大学院医学研究科修了。博士(医学)。専門は精神病理学。現在は京都大学大学院人間環境学研究科准教授。

主著：『人はみな妄想する——ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』(青土社、2015年)、『享楽社会論——現代ラカン派の展開』(人文書院、2018年)、『発達障害の時代とラカン派精神分析——「開かれ」としての自閉をめぐって』(共著、晃洋書房、2017年)、『症例でわかる精神病理学』(誠信書房、2018年)、『心の病気ってなんだろう?』(平凡社、2019年)、『創造と狂気の歴史——プラトンからドゥルーズまで』(講談社選書メチエ、2019年)

15分で読む ジャック・ラカン生誕120周年によせて ブックガイド

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体価格	刊行
誠信書房	4414404203	はじめてのラカン精神分析 ——初心者と臨床家のために	アラン・ヴァニエ著、赤坂和哉・福田大輔訳	2000	2013
ちくま学芸文庫	4480096760	ラカン入門	向井雅明	1400	2016
誠信書房	4414416312	疾風怒濤精神分析入門——ジャック・ラカンの生き方のススメ	片岡一竹	2300	2017
誠信書房	4414414301	ラカン派精神分析入門——理論と技法	ブルース・フィンク著、中西之信ほか訳	5000	2008
誠信書房	4414414509	精神分析技法の基礎——ラカン派臨床の実際	ブルース・フィンク著、椿田貴史ほか訳	5000	2012
人文書院	4409340479	後期ラカン入門——ラカンの主体について	ブルース・フィンク著、村上靖彦監訳、小倉拓也ほか訳	品切れ	2013
人文書院	4409330524	「エククリ」を読む——文字に添って	ブルース・フィンク著、上尾真道ほか訳	4500	2015
河出書房新社	4309242491	ジャック・ラカン伝	エリザベト・ルディネスコ著、藤野邦夫訳	品切れ	2001
朝日出版社	4255870014	人格との関係からみたパラノイア性精神病	ジャック・ラカン著、宮本忠雄・関忠盛訳	品切れ	1987
金剛出版	4772490429	フランスの妄想研究〔オンデマンド版〕	小木貞孝	3800	2021
群馬病院出版会	4335651663	ラクリモーサ 濱田秀伯著作選集	濱田秀伯	3800	2015
弘文堂	4335651809	理性狂——解釈妄想病と復権妄想病	ポール・セリュー、ジョゼフ・カプグラ著、濱田秀伯監訳、千葉洋訳	6300	2018
講談社学術文庫	4062920896	二人であることの病い——パラノイアと言語	ジャック・ラカン著、宮本忠雄・関忠盛訳	700*	2011
講談社学術文庫	4062924023	テレヴィジョン	ジャック・ラカン著、藤田博史・片山文保訳	600	2016
青土社	4791727346	精神分析への抵抗——ジャック・ラカンの経験と論理〔オンデマンド版〕	十川幸司	2800	2012
早川書房	4152089366	本当のところ、なぜ人は病気になるのか？——身体と心の「わかりやすすくない」関係	ダリアン・リーダー、デイヴィッド・コーフィールド著、小野木明恵訳	品切れ	2008

* 電子書籍

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
左右社	4865282955	ハンズ——手の精神史	ダリアン・リーダー著、松本卓也・牧瀬英幹訳	2200	2020
誠信書房	4414400991	精神分析と描画——「誕生」と「死」をめぐる無意識の構造をとらえる	牧瀬英幹	3200	2015
弘文堂	4335150487	精神分析における話と言語活動の機能と領野——ローマ大学心理学研究所において行われたローマ会議での報告 1953年9月26日・27日	ジャック・ラカン著、新宮一成訳	4000	2015
青土社	4791768585	人はみな妄想する——ジャック・ラカンと鑑別診断の思想	松本卓也	3200	2015
洛北出版	4903127293	言語伝承と無意識——精神分析と民俗学	岡安裕介	3200	2020
青土社	4791763320	精神分析の抵抗——フロイト、ラカン、フーコー	ジャック・デリダ著、鶴飼哲ほか訳	2200	2007
岩波書店	4000611572	ジャック・デリダと精神分析——耳・秘密・灰そして主権	守中高明	2900	2016
岩波文庫	4003860168	ジャック・ラカン 精神分析の四基本概念 上	ジャック・ラカン述、ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之ほか訳	780	2020
岩波文庫	4003860175	ジャック・ラカン 精神分析の四基本概念 下	ジャック・ラカン述、ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之ほか訳	1010	2020
以文社	4753103386	主体の論理・概念の倫理——二〇世紀フランスのエビスタモロジーとスピノザ主義	上野修・米虫正巳・近藤和敬編	4600	2017
人文書院	4409340554	現実界に向かって——ジャック＝アラン・ミレール入門	ニコラ・フルリー著、松本卓也訳	2400	2020
人文書院	4409340509	ラカン 真理のバトスー1960年代フランス思想と精神分析	上尾真道	4500	2017
平凡社	4582703405	現代思想と政治——資本主義・精神分析・哲学	市田良彦・王寺賢太編	6800	2016
読書人	4924671379	〈68年5月〉と私たち「現代思想と政治」の系譜学	王寺賢太・立木康介編	3600	2019
岩波書店	4000614870	精神分析の再発見——フロイトの神話、ラカンの闘争	工藤顕太	5900	近刊
創元社	4422115894	現実的なものの欲待——分析的経験のためのパッサージュ	春木奈美子	3200	2015
河出書房新社	4309249810	女は不死である——ラカンと女たちの反哲学	立木康介	2700	2020

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体価格	刊行
福村出版	4571240850	精神分析にとって女とは何か	西見奈子編著	2800	2020
誠信書房	4414400656	ラカン派精神分析の治療論 ——理論と実践の交点	赤坂和哉	3300	2011
人文書院	4409330517	ラカン 患者との対話——症例 ジュラール、エディプスを 超えて	小林芳樹編訳	2500	2014
文化科学高等 研究院出版 局	4938710392	ラカンの剰余享楽／サントーム (LIBRARY iichiko No. 140)	河北秀也監修、新宮一成ほ か著	1500	2018
誠信書房	4414416305	ニューロラカン——脳とフロ イト的無意識のリアル	久保田泰考	3000	2017
晃洋書房	4771029002	発達障害の時代とラカン派精 神分析——“開かれ”とし ての自閉をめぐって	上尾真道・牧瀬英幹編著	3800	2017
創元社	4422115740	ことばと知に基づいた臨床実 践——ラカン派精神分析の 展望	河野一紀	3200	2014
人文書院	4409340516	享楽社会論——現代ラカン派 の展開	松本卓也	2200	2018
せりか書房	4796703703	ラカン『精神分析の四基本概 念』解説	荒谷大輔ほか	品切れ	2018
人文書院	4409340356	精神分析と現実界——フロイ ト／ラカンの根本問題	立木康介	3200	2007
水声社	4801001596	狂気のお、狂女への愛、狂気 のなかの愛——愛と享楽に ついて精神分析が知っている 二、三のことから	立木康介	2500	2016
河出書房新社	4309246376	露出せよ、と現代文明は言う 「心の闇」の喪失と精 神分析	立木康介	2400	2013
中公新書	4121021663	精神分析の名著——フロイト から土居健郎まで	立木康介編著	品切れ	2012
みすず書房	4622088103	フロイディアン・ステップ ——分析家の誕生	十川幸司	3200	2019
福村出版	4571240706	精神分析の迅速な治療効果 ——現代の生きづらさから 解放されるための症例集	ジャック＝アラン・ミレー ル監修、森綾子訳	2500	2018
講談社 選書メチエ	4065153406	アンコール	ジャック・ラカン著 藤田 博史・片山文保訳	1950	2019
三輪書店	4895904216	天使の食べものを求めて—— 拒食症へのラカンのアプ ローチ	ジネット・ランボー、キャ ロリーヌ・エリアシエフ 著、加藤敏監修、向井雅 明監訳、松本卓也解説	3400	2012

置いてある本「が」売れる

小林 えみ（マルジナリア書店）

ふたつ、書店と関係ない話からしよう。

まず仮定の話。夜中に漫画『美味しんぼ』9巻を読んでいたら、美味しすぎてお坊さんが壁を飛び越える、という「佛跳牆（ファッチューション）」という料理が食べたくなったとする。まず、ほとんどの人が「佛跳牆」を食べて満足する、ということにはならないだろう。家にあるものか、コンビニで中華っぽいものを買うか、何か別なモノをみつけてそちらに目移りするかもしれない。どうしても食べたい気持ちが続いたら、翌日や週末に、メニューのある店を探して食べに行くかもしれない。ただ、多くはそこまでしないだろう。

次にこちらは実体験。学生時代にコンビニでバイトをしていたときに、あるプリンを仕掛け売りして本部からおほめの言葉を頂いた。あるお客さんが少し高めのプリンを「これはおいしい」と教えてくださったので、そのプリンだけ棚1列揃えて「イチオシ」にし、ほかのプリンは2種類、全然タイプの違う安いものだけを置いた。ほかのプリンを並べておくより3、4倍の売上になったと思う。全面推しは特に新しい手法ではないが、均質化が重点的になされていた90年代のコンビニでは珍しくみえたことも成功の要因だったかもしれない。

ふたつとも、すごく単純な話で、そこに「ある」ものは売れる。買う理由がつかれば売れる。置いてない、買にくいものは売れにくい、しかし置いてあるだけでは売れない。出版社を運営しながら、書店の現場に立って、改めてそのことの意味をよく考えるようになった。

マルジナリア書店は14坪の小さな書店だ。取次配本はないので、仕入れは完全にお店主導だ。という話をするとお客様からはよく「全部の本を読んでるんですか」「好きな本を置いてるのですか」のふたつの質問を頂く。冊数がそれほど多くはないといえ、前者は絶対ありえないし、後者については、そうともいえるし、しかし、それだけではない。

「嫌いな本」、たとえばヘイト本を置くことはないが、私がプライベートではほとんど見ない「映画」の関連本は置いている。これらの本は、書誌情報・版元のオススメや読者（今までご来店になられたお客様）の傾向などを見て「選書作業」をしている。取次配本を利用している大型書店でも、すべてが配本されるわけではないから、行われている作業と同じだろう。選好性は働が、一般のお客様が想像されるような「個人のプライベートな趣味」とは少し異なる。

その「趣味」とは異なる観点のひとつが、まず仕入れ値。

短歌を学ぶ入門書がある。類書があつて、Aは取次経由買取で8掛け、Bは直取委託6か月後精算で6掛けなら、あなたならどちらの本を仕入れるだろうか。

本の原価は高い。仮に、ほとんどの本が8掛けだとする。月の売上が100万円あっても利益は20万円。ほとんどの本が6掛けなら40万円。基準値は7掛けで、現在はそれより少し高いくらいだろう。

良書が売れる、はつくる側のロマンだ。私も本をつくる立場のときには全力で「良い本」をつくり、それが選ばれることを願っている。そして、書店として「前提（売れにくい／原価は高い）」があるが、「良い本」だから置きたい、ということもある。しかしそんな「前提」付きの本だけで、書店経営は成り立たない。

時折、大型書店の人文書棚に関する同じ意見を見聞することがある。「棚がせまくなった」「良い本が減った」。もしくは書店員側から「店（経営）の方針でそういう本を置きにくい／返品させられた」……。読書する立場としては首肯し、状況を憂えなくなる意見だが、経営の意向も、特に今はよくわかる。大型店で古くなったエスカレーターの修理に7桁のお金がかかったという。仮に修理費を300万円として、そのお金を3000円の人文書8掛けの利益だけで賄おうとしたら5000冊分。6掛けなら2500冊分。マルジナリア書店はエアコンクリーニング3万8500円だけで泣いているが、それをおしんで業務用エアコンを買いかえることになったら借金かもしれない。

単純な取次不要論、中抜きすればいいとは思わないが、書店の利益率の低さを考えるとき、取れる手段は講じたいし、少なくとも類書の比較ポイントにはなる。私が大型店の経営者や店長で、「AよりBを仕入れてください」を現場に指示したら「本のことがわかってない金儲け主義」などと言われる気がするが、実際、現場へ払っているお給料も含めた死活問題に、殿様商売で「好きにしなさい」とは言えないだろう。細やかにやるのであれば、Aを仕入れつつBとの売り場比重をどうするか、などの検討だろうか。しかし、私自身も「Aは良書だからなあ」を切りきりせずに、Bを3冊入れてAも1冊というような、経営者としては甘い判断をしがちだ。

趣味だけで本を選べるのであれば苦勞はない。棚の分量、バランス、仕入れ値、そのお店のお客様の傾向、さまざまな情報を判断しながら日々、既刊書・新刊と何千何万の本から選んで売り場をつくる。諸先輩がたの苦勞や、他店のすばらしさに、日々尊敬の念を強くしている。

そうして、苦勞して「置かれた本」が、売れる。客注も入るので「置かれていない」本が売れないわけではないが、人氣に火が付いた「メガヒット」を措けば、「売れる人文書」とは基本的には、そこに「ある」本であり、そこで買われる理由がうまくお客様とマッチした本だ。

出版の営業で「いかに良書か」を語られることがある。無意味ではないけれど、よほどの耳打ち情報ではないかぎり、そうした「本の内容」は公開情報やチラシで大体わかる。私は、このお店でどう置いたら、どのように売れそうか、が知りたい。もちろん、このような零細店の個別情報を熟知してほしい、ということではないけれど、内容だけでゴリ押しされても困る。ある本が、端的に言えばカバーが非常にダサかった。キャッチコピーに「うわっ…私の年収、低すぎ…?」（ネット広告と付けたくなるような、借り物イメージ写真を安易にペタッと張ったようなものだ。専門書を無理にお金をかけてオシャレにしなくてもよく、シリーズの共通カバーで図版と文字だけ、などシンプルでかえって心地よい。とはいえ、いい加減は困る。お客様は本屋へ行き、さまざまな本の中から読みたいと思える本を選ぶ。すでに類書もあり、あえてそのダサイ本を当店に置く必要は感じなかった。そうして、「置かれない本」は、基本的に売れない。

文芸書の「この作家のこの本／新作」、研究者や仕事上の「これでなければ」がなければ、読者が読みたい本の中で「わざわざお金を出して買う本」は、なんらかの理由付けがある本だ。テ

レビで紹介された、SNSでバズる、もその一つだが、いまだに王道は「まず店頭で置かれた本」であり「その置かれた場所でオススメしている本」で、自分の蔵書としたい本だろう。

東京郊外、2021年1月に開店したマルジナリア書店で、通算100冊以上販売した書籍がすでに7点ある。分野も値段も著者もバラバラなそれらの共通項は「良い本で／かつ、マルジナリア書店が版元や著者と一緒に推した」本であることだ。100冊売れる店が全国で5店、10店あれば人文書版元としては御の字だろう。そしてそれは大型店に限らなくなっているということを知ってほしい。

社会全体の情報のあり方が変容している中で、本の読まれ方・買われ方も変わり、流通・販売も変化をせざるをえない。卸値・取引形態・カバー（見た目）も、以前はこうだったから、ということではできるし、それで良い状況が保てているのであれば外野がどうこういうことではないが、生き生きして良い本を出し、楽しそうに本を売る版元・書店は、変化に対応する工夫をしている。

「この本、いいのになかなか売れないんですねー」

そのボトルネックは何か？

ひとつではない答えを、本を愛するすべての関係者と一緒に探っていきたい。

面白い本、良い本を、もっと読者に届けていきたい。

本のもつ魅力・販売のポテンシャルはまだまだ枯渇していないと私は信じている。

小林 えみ（こばやし えみ）



著者近影

可能性の持久力

—— 「新しい図書館」 たらうとするせんだいメディアアテークの20年目

小川 直人（せんだいメディアアテーク学芸員）

はじめに

ゆったりとした歩道とケヤキ並木を構える大通り。その木々を映すスクリーンのような広いガラスのファサード。せんだいメディアアテークは、2001年宮城県仙台市に開館した図書館を内包する複合文化施設である。世界的な建築家・伊東豊雄氏によって設計された、チューブと呼ばれる鉄骨の構造体で薄い鉄板のプレートを支え、外部はガラスに囲まれて内部は壁が少ないつくりは、しばしば「透明な建築」と称されている。地上7階・地下2階のこの施設は、図書館のほか、企画展や貸

出を行うギャラリー、上映設備をふくむ市民文化活動に開かれたスタジオ環境、そして、視聴覚障害者のための情報提供事業の4つを基本的な機能として持つ。それらを統合したものを「メディアアテーク」と名指したのは、設計コンペの審査委員長となった建築家の磯崎新氏だ。

現在は、公益財団法人仙台市市民文化事業団が指定管理者として施設全体の管理運営を受託しているが、映像音響資料、主だった視聴覚障害者と学校・社会教育向けサービスを除く、一般書・郷土資料・児童書といった図書館の基幹部分の運営は仙台市の直営となっている。つまり、組織上は、施設の管理運営とメディア・芸術文化事業を司るせんだいメディアアテーク（指定管理者…仙台市



せんだいメディアテークは、2001年宮城県仙台市に開館した図書館を内包する複合文化施設である。(撮影：越後谷出)

民文化事業団)と、仙台市民図書館(仙台市直営)のふたつの組織がひとつ屋根の下にいたのであるが、ここを利用する人々にとって、メディアテークと市民図書館の区別は確かではないことも少なくない。むしろ、それでまったくかまわないのだろう。

まず、21世紀に入り国内で構想された複合文化施設の参考例のひとつになったと言っても良いだろう、この「せんだい」について、メディアテークが新しい図書館とは何かを模索してきた経緯から論じてみたい。

せんだいメディアテークの成り立ちと図書館の位置づけ

1980年代末、大型のギャラリーを中心とした市立美術館建設の要望が地元芸術団体から出されていたが、1993年には、老朽化した市民ギャラリーの移転・新築の構想として整理され、それに併せて、これもまた老朽化していた市民図書館、そして、視聴覚教材センターをアップデートした映像メディアセンターのアイデアなどが盛り込まれた複合文化施設とする方針が決まる。ところが、当時の市長がいわゆるゼネコン汚職に

より失職したことの反省から、公開設計競技とすることとなり、その設計競技の審査委員長を建築家・磯崎新氏へ依頼、「新しいメディアと組み合わせられた独自の建築型が創出されていることが特に望まれる」(コンペティション要項より)「コンペティションの審査にあたって」/1994年9月)という氏の強いメッセージによって、博物館でも文化会館でもない、図書館でもない、これまでの公共施設の慣習に縛られない「メディアアテーク」という名の場が構想されることになった。

専門家のみによる公開の審査という場を通じて選ばれた伊東豊雄氏の案と、他方でソフトの面を検討する委員会から派生した有志によるプロジェクト・チーム(代表・桂英史/メディア論、図書館情報学/当時東京造形大学助教授で現在は東京藝術大学大学院教授)によって、(仮称)せんだいメディアアテークは、ギャラリーを中心とした構想から、本に限らない未来のメディアを扱う新しい文化施設とはどのようなものかという問いに移っていく。開館後に発行された『せんだいメディアアテーク コンセプトブック』(発行・N T T出版/2001年/その後、新版、増補新版)では、次のように述べられている。

——せんだいメディアアテークという組織そのものは図書館ではありません。正確に言えば、50万冊規模の蔵書をもつ図書館を内蔵した文化施設です。見方を変えれば、ギャラリーやスタジオやシアターを併設した新しい図書館であるとも言えます。——

当時、あるいは、今日においても想像され続ける新しい図書館のひとつとしてのメディアアテーク。しかし、それは「図書館」という確固たる文化/制度の前でもがき続けることでもあった。「メディアアテークと図書館の管理運営の一元化」は構想時からの課題であり、複合的な生涯学習支援施設として重要な要件であったとも言えるが、当時公立図書館は各自治体が直接運営することが必ずであった。今日でこそ民間による運営事例がめずらしくないもの(もちろん、それがすべての問題を解決する策でないことも明らかになってきている)、「新しい図書館」になりえるかもしれないとはいえ、まだ誰もその確たる姿をイメージできずにいた「メディアアテーク」というアーキ

タイプ／制度は、戦後の図書館をめぐる歴史からしても、仙台市における歴史からしても、図書館のすべてを賭けるにはまだ想像が及ばないものだったのかもしれない。

メディアテークと市民図書館の連携

——「よくわからない」ゆえに挑戦できる

せんだいメディアテークは図書館ではない。そのことが、構想以来の煩悶のもとではあったが、そのことがかえって今日に到るまでメディアテークが図書館とは何か、図書館で何ができるかに挑戦し続ける原動力ともなったとも言えるだろう。

仙台市民図書館との一体運営は断念したものの、開館当初から数年は一人の館長が両組織を兼務する体制でその可能性を模索することになる。しかし、代が変わるにつれ館長の席は図書館のオフィスに置かれるようになり、2008年には館長を兼務する体制も途絶える。だが、その年からメディアテークと市民図書館の共催事業「としょかん・メディアテーク・フェスティバル」が始まった。さらには翌年、メディアテークと市民図書館の職員

によるワーキンググループが組織され、業務上の連携について恒常的に話し合われる場が設けられるようになる。筆者は2014年からその一員として参加することになるのだが、ちょうどその時期は、2011年の東日本大震災を機に立ち上げた市民協働型震災アーカイブ事業（3がつ11にちをわすれないためにセンター）が一定の蓄積を見せると同時に、メディアテークの構想時から考えられていたものなかなか形にならずにいた、事業を通じて映像アーカイブの公開が具体化しはじめた頃であった。

メディアテークと市民図書館のより本格的な融合の可能性を探る準備はできた。そこで、年に一度実施していた「としょかん・メディアテーク・フェスティバル」を「とぶらす・ウィーク」とあらため構築し直す。しばしばイベントは集客数、図書館は貸出数だけで自らを評価してしまふことがあるが、ふたつの組織が一緒に取り組むべきことは何かをあらためて整理した。事業の目的を「館内にあるライブラリー機能の紹介」「利用者、および、利用体験の多様化を促すこと」「連携によるライブラリー機能の改善・拡充」と定め、具体的な企画は、外から持ち込むコンテンツではなく、館内の資料やサービ

スをいかに使い倒し組み立てるかということに照準を定めた。そこで行った企画をいくつか紹介しておこう。

「十代が選ぶ、夏の約100冊」(2016年)という企画では、市内いくつかの中学校・高校の図書委員会に協力を仰ぎ、中高生自身が選ぶ夏休みの推薦図書をまとめて展示した。なお、唯一大人の選者として、仙台在住の小説家・伊坂幸太郎氏にも何点か選んでいただいた。できあがったリストを見て、協力してくれた中高生たちが驚いたの言うまでもない。

2017年には、市民図書館が所蔵している和漢書を展示した。博物館ならば展示ケースに入れて陳列するような代物だが、郷土資料担当のチームが尽力し、図書の蔵書である以上「読めるようにする」のが基本として、学芸員の感覚からは想像もつかない、大胆にもページをめくられるように直に本が展示された。一般の人々には存在が知られることもなかったこれらの書物は「モノとしての力」を発揮し、多くの方々が興味を示してくれ、初めて本物の和綴じ本を見る子どもたちや写真を撮る外国人でにぎわった。その様子に驚いたのは、埋もれていた蔵書にこれだけ関心を持たれた私たち職員であった。

図書館ではやや影の薄い存在となりがちな視聴覚資料の活用を目論み、学校の昼の校内放送に見立て、「昼と夕方の館内放送」(2019年)という企画をしたこともある。つまりはイベント会期中に毎日ラジオ番組のようなことをするのであるが、この企画の肝は、地元のアーティストや館内の職員がパーソナリティ役をしながら、トークの合間にかける楽曲はすべて館内の映像音響ライブラリーから選曲し、選曲したプレイリストを毎日更新・公開することにあった。館内のCD資料は、決して大規模なものでもなく、最新の楽曲を取りそろえていないものの、さまざまな人に見立てをしてもらおうことで「ここにはこんな資料もあるのだよ」ということを伝えることができ、実際にそれまで動かなかった資料の貸出に結びついた。

ここに挙げた例はいずれも、図書館の財産である「資料」にさまざまな人がさまざまな方法で触るきっかけをつくることだったわけだが、そうしたきっかけづくりとなるイベント事業を温めながら、日常的な連携についても検討を続けていた。その成果のひとつに市民図書館フロアに設けられた「メディアアートの本棚」があ



「昼と夕方の館内放送」の様子。トークの合間にかける楽曲はすべて館内の映像音響ライブラリーから選曲した(2019年)。



メディアテークが企画・発行した書籍や、事業のテーマに関連する本を集めた「メディアテークの本棚」

る(2017年から)。開館以来今日に到るまで見学者の絶えない、そして未だ「なにをしているのかよくわからない」と言われることもあるメディアアテークなので、最も人が訪れる図書館のフロアの目立つ場所に、メディアアテークが企画・発行した書籍や、事業のテーマに関連する本を集めて棚をつくろうというものである。一見地味ではあるが、図書館の分類にも寄らず、一時的な特集展示でもないこの場所が設けられたことは、構想時から続くメディアアテークと市民図書館の一体化に、空間的にも近づいたことであった。

アーカイブ——同時代の郷土資料のために

2011年3月の東日本大震災は、メディアアテーク／市民図書館にも大きな被害をもたらした。書架から本はとびだし、最上階の天井は剝がれ落ちた。全館の再開までは一年を要したのだが、それに先立ち、同年5月3日には3階の市民図書館までのフロアを開館させている。被害が大きく、避難所機能もないので閉館せざるを得なかった当館だが、図書館をはやく再開してほしいという

要望と、街のシンボリックなこの施設が動き出すことで少しでも震災から前に進み出すことができればという思いがあった。

生命に関わる復旧・支援が必要とされていた状況のなかで、メディアアテークにできることは何か。その問いから導き出された答えは、慣れない新しいことをやるよりも、これまでの経験を生かし、生涯学習施設の本来の役割に沿ったものであるとして、市民協働による震災アーカイブを支えるプラットフォームをつくることとなった。それが「3が11にちをわすれないためにセンター」(略称：わすれん!)である。

わすれん!は、アーカイブ機関そのものというよりは、東日本大震災にまつわるさまざまなことを記録しようとする活動(メディアを使った実践)を支える技術や環境を提示する場であり、そこでの活動の結果として、震災にかかわるアーカイブが形成されていくという仕掛けである。プロかアマチュアか、仙台市民かどうかとも問わない。活動する人が主体であり、記録したものの利用などについて一定の条件を承諾してもらうことで自由に利用できる。また、何を記録するかは個人の考えに任されている。

我々職員側が記録対象や方法について指示することはないが、受け取った成果の上映や展示、インターネット公開の制作については責任を負うことにより、より効果的な見せ方や、一定の倫理・公共性が保たれるようにしている。さらには、わすれん！にアーカイブされている記録物は、参加者からの著作権譲渡ではなく、震災の伝承にかかる非営利の活動全般における利用許諾としており、公的機関が記録活動の成果を吸い上げてしまうのではなく、あくまで、アーカイブが市民の側にあり、将来にわたって自由に利用できるようにしておくことを担保している。

ところで、東日本大震災は日本社会に「アーカイブ」という言葉を知らしめたひとつの契機だった。わすれん！での取り組みもそれにあたる。かねてから言われてはきた、地域のことを記録・保存しておくことの重要性、また、それが一人ひとりの手でできるようにもなったことが、この震災を機にあらためて認識されたと言えよう。東日本大震災から10年という月日がなんらかの区切りになったかと思われれば、それほど簡単に割り切れないが、あれほど大きな出来事でも10年も経てば社会全体では遠

いものようにも思われ、だとすれば現在のこともすぐに遠い過去になり得る、あるいは、放っておいては過去として残りすらしなないかもしれないということを学ぶことができるだけの時間ではあった。

先に触れたとおり、メディアテークでは震災アーカイブと併行するようにして、これまでの事業記録映像や、市民協働による地域文化の記録映像・音声のアーカイブをパッケージ化して映像音響ライブラリーで公開する取り組みにこの10年注力してきた。それが「smtコレクション」と呼ばれるシリーズである。これはメディアテークを拠点とした文化活動のアーカイブであり、やや古めかしく手垢のついた「郷土資料」という言葉を更新する「同時代の郷土資料」と言うこともできるだろう。東日本大震災の記録をアーカイブしてきたことを通じて、メディアの多様化と情報量の爆発によって、何を残し、どのように伝えるかがむしろ一層困難になっているとも考えられる今日こそ、「現在」を記録し資料化していく意味、未来を語るためにアーカイブがあることを痛感している。日常での資料利用の多くはベストセラー本や娯楽映画であり、郷土資料のそれは大切とは言われながら



「現在」を記録し資料化していく「smtコレクション」。

全体としては数少ない。しかし、わすれん！やsmtコレクションで行われる「現在」を記録し資料として活用しようとする取り組みは、地域の知を歴史化し、その未来を創造する学びあいのための基盤となるものであり、図書館の基本的な役割である「収集」を一歩進めて、自ら資料を「生成」する段階に進んだとも見なすことができる。

さらには、開館から20年目を迎えようというときにコロナ禍に見舞われているせんだいメディアアテック。臨時休館はもとより、開館していても館内の椅子は取り払われ、毎日3000〜4000人の来館者も半減、人が集まる事業もほとんどできない。震災後に行ってきた「てつがくカフェ」のように、人々が集い対話する「場」を生み出すことが使命のひとつであった我々にとって、この事態は震災に続き再び自らの存在意義を問い直させることとなっている。そのようななか、2020年6月からはこれまでDVDで提供していた講演会や展覧会の記録映像をインターネットで配信しはじめた。そこでは、わすれん！に参加した人々の記録をもとに仕立てられた展覧会「記録と想起・イメージの家を歩く」や震災

後にせんだいメディアアテーク館長に就任している哲学者の鷲田清一の一連の講演などが公開されている。その後、新型コロナウイルスにより実施することができなくなったトークイベントを取録企画として切り替え配信することにも着手している。それらには、地元の舞台演出家を中心となり企画して、役者や他の地域の関係者とオンラインでつながりながら「コロナ禍における舞台芸術はどうだったのか／どうなるのか」というテーマで話し合うものや、東日本大震災からの10年を仙台在住のラッパーによるヒップホップ界隈の考察を通じて紐解く「リリックにみる震災からの10年」などがあり、「現在」を記録し直ちにアーカイブとして残していく指向性を打ち出した。

おわりに

2011年、開館から10年目、地域の文化創造活動に貢献した功績を認められて地域創造大賞(総務大臣賞)を受賞し、それまでの活動を振り返るべくシンポジウムを企画していたところ、その前日の3月11日に東日本大震災に見舞われ、地域の人々やメディアも、運営する私

たち職員も落ち着いて開館からの10年を振り返ることができなかった。そこからの10年は震災からの復興に駆け抜け、そして、20年目の区切りにはコロナ禍に見舞われている。準備室からの職員として、あるいは、仙台で生まれ育った市民の一人として、これからのせんだいメディアアテークに思うところはさまざまだが、個人的な思いよりも、10年前、数ヶ月後に未曾有の災害に見舞われることもつゆ知らず組まれていたとある対話を振り返って本稿を終えたい。

2010年の冬、『まぢりよく』(発行：仙台市市民文化事業団「せんだいメディアアテークの指定管理者である母体組織」／2010年12月発行号)という小さな情報誌に、メディアアテーク10周年に際して、館にゆかりのある地元の人物による座談会が組まれた。仙台発で今や世界的に活躍するビジュアルデザインスタジオWOWWのアートディレクター鹿野護氏、この街の文化的中心のひとつともいえるブックカフェ火星の庭の前野久美子氏、そして、メディアアテークの来館者調査を行ってきた建築計画学研究者の坂口大洋氏らによる「メディアアテーク以前・メディアアテーク以後、そして仙台のまぢはどう変わったか」と題

されたものである。「ローカルでありグローバルであること」「小さくつないで街をかえる」といった切り口で話は進むのだが、最後に坂口氏から少し変わった問いかけが発せられる。それは「2030年のメディアアタークを思い描くとどのような風景が浮かびますか？」というものだ。2030年と言えば当時から数えて20年後、現時点からは10年後である。その問いに、鹿野氏は「人と人が顔を合わさなきゃいけないし、新しいメディアに触れていける場所であってほしい。さらに言えば、もう少し偶発的な部分から『こと』が立ち上がる。そういう状況になるといい」と言い、前野氏は「(中略)非効率性を深くして、いろいろな可能性を試しまくってほしい」、さらに、「メディアアタークはそれ自体だけで成立するのではないので、街が20年後どう変わるかという視点が大事」と返す。そう、せんだいメディアアタークはこの施設のなかだけで完結するものではないし、そうであってほならないのだろう。社会の変化に目配りしながらも、単に脊髄反射的にニーズを満たそうとするのではなく、さまざまな少数派のささやきや、定まらない未来を手探りする身ぶりに呼应しながら、この街とそこに住まう人々

にとつての「必要な場」であり続けること。

せんだいメディアアタークはその構想時から新しい図書館像をイメージしてきたが、そもそも図書館ではなく、あるいは、博物館でも、文化会館でもない、新しい建築／社会的機能としての場を仮に「メディアアターク」と呼び続けてきたとも言える。特に、東日本大震災からのこの10年は対話やアーカイブという言葉を支柱にして取り組みを続けてきたが、それは図書館の基本的な部分を更新しようとする振る舞いだったようにも思われる。もしかしたら、このように「新しい図書館たろうとする」試行錯誤を続けられていることが、この場所がこの街に存在するひとつの意味なのではないだろうか。2030年はあと10年あまり。どのような風景を思い描くのか、多くの人々とともに考えていきたい。

一冊の武器の向こうに

武器を満載したトラックが会社に横付けされると内線
で呼び出される。昭和中期の竣工で、採光に関する設計
のせいなのか、一日を通して光量の少ない社の玄関から

外へ出ると、途端に真昼の太陽の眩しさを思い出させら
れる。すでに営業部と出版部の男性陣がトラックの脇に
並び、汗みずくの運転手から黙々と積荷を受け取り台車
に積みかえている。私も列に混じり、包まれた武器を台
車に積み、会社の倉庫に運び込む。黙ってそれを積み上
げる。いつ何時トラックがやってくるのか、私には知り
ようがなく、そして春夏秋冬いつでもそれはやってくる。
真夏にすれば汗だくになり、トラックと倉庫を何往復か
するうちに翌日以降の筋肉痛を確信する。無言で作業を
続けるうちに、これを売って食べているから僕らは武器

楠本 龍一（誠信書房 編集部）

商人ですわねという軽口をたたきたくなることもあるが、
多分笑ってもらえないだろうと思いつつまだ一度も実行した
ことはない。

『影響力の武器』との関わりは、入社後しばらくこう
した肉体労働を通じたものだった。台車への本の束の積
み方も、『影響力の武器』を通して覚えた記憶してい
る。ことほど左様に重版が頻繁だということのようだけ
ら、喜ぶべきなのだろう。しかし一社員としてそのただ
中にいると、どう実感してよいかわからない。シリーズ
直近二冊の編集を担当して既刊書も含め内容を把握した
今となっても、倉庫に黙々と台車を運び込むあの独特の時
間が、本書のイメージに重なり続けている。

たまたまだった

大量の武器が運び込まれた余韻がまだ社屋に漂う終業後、人気のなくなったフロアの奥にある経理室に行った。その時間に経理室で残務に取り掛かる小社社長の柴田に話を聞くのが目的だった。一九九一年の小社のことを知るのには、すでに柴田ひとりのみとなっていた。三十年前



『影響力の武器』シリーズ

である。一九九一年というのは、今回紹介の任にあずかったシリーズの端緒となる『影響力の武器』の初版が刊行された年だ。当時のことを聞くと、元々は現在のよるな販売の仕方は想定しておらず、あくまで小社で普段から刊行する、研究者向けの社会心理学書の一冊として考えていたようだ。確かに初版を手にとってみると、現行版である第三版の四六判に対して、A5判の初版は、淡いグリーンのカバーに大人しめの題字が配され、いわゆる学術書然としている。実際の売れ行きもいかにも学術書らしかったという。変化が現れたのが、第二版を刊行した二〇〇七年頃らしく、ビジネス層も読者対象にという方針のもと、判型を変更し、カバーデザインも刷新した後に、現在のような動きを見せる書となったということだ。その後『影響力の武器 実践編』(二〇〇九年)、『影響力の武器 コミック版』(二〇一三年)、『影響力の武器』第三版』(二〇一四年)、『影響力の武器 戦略編』(二〇一六年)、『プリ・スエーション』(二〇一七年)、『影響力の武器 実践編 第二版』(二〇一九年)、『ポケットブック 影響力の武器』(二〇二〇年)と刊行を続けている。ここに一九九八年刊行の『プロバガンダ』を加えて、本稿ではシリーズ

として考えている。もつとも前述のような経緯で、当初はシリーズ化の構想は特になく、また、米国の社会心理学者R・B・チャルディーニ氏もしくはその近い研究者が原著者だという連帯はあるものの、原書のほうが明確にシリーズとはされていないので、小社のHPでも「影響力の武器シリーズ」として扱ってはいない。一冊一冊、その時々々に刊行していくなかで、段々シリーズのようになって、認知を得るようになったというのが正確なところのようだ。この日の柴田の言葉を借りるなら「たまたまだったんだよ」というところだろうか。

話を聞き終えてその日は退勤した。後日、社会心理学者の安藤清志先生に、本稿を書くためにお話をお聞きした。先生には本シリーズすべてに監訳者・翻訳者として関わっていただいている。

目の前のことに取り組むなかで

「自慢ではないけど、わたしには本当に主体性がない」と笑いながら語られた安藤先生の言葉を額面どおりに受け取るべきなのかはいまでもってわからないが、安藤先

生の長い業績リストは、他の研究者に誘われたり頼まれたりして、その時々々に論文を執筆するなかから徐々にできていったということらしい。こうしたあり方を「言い訳」と表現されたり、東京大学時代は「お酒を飲む相手を採すために大学に行っていた」とお酒好きエピソードを語られたりと、非常に魅力的なお話がたくさんあったのだが、今回は紙幅の都合で『影響力の武器』に関連する話題に絞ると、東大社会心理学科の古畑和孝先生が『人間関係の社会心理学』（サイエンス社、一九八〇）の編集をされた際に、安藤先生に「態度と態度変化」の章を依頼された。安藤先生はその時点で興味をもっていたわけではない領域であったが、米国の心理学のテキストなどを読んで該当の章を書き上げた。これをきっかけにこの領域に関心をもたれ、チャルディーニ氏の*Influence*（『影響力の武器』の原書）を「たまたま」見つけて気に入り、安藤先生も所属する社会行動研究会を訳者として、小社へ翻訳のお話をいただいたということらしい。「『態度と態度変化』の章を書かなければ、『影響力の武器』の翻訳をすることもなかったでしょうね」と語られた。ちなみに、安藤先生は『影響力の武器』の翻訳を開始してか

ら、学術的な質問などのためチャルディーニ氏と度々連絡を取り、氏が国際学会で来日した折には関係者と共に東京・京都を案内したり一緒に食事をしたりしたらしい。また、二〇〇七年に日本心理学会の大会が東洋大学で開催された際には、氏を講演者として招待し、滞在中に何度か「飲み会」もされたという。それらのときの貴重な写真も見せていただいたが（お酒があるためか）この上なく楽しそうなお様子であった。

安藤先生のスタイルに端を発し、目の前のことに取り組むなかから、本シリーズの形ができてきたということが見えてきた。ところで、後述のように、本シリーズには現実の社会問題と関わる側面があり、この問題意識はその後の安藤先生の研究において、カルト問題や事故遺族に関するお仕事に繋がっていったようだ。

影響力の武器を使ってみた——体験を書くということ

シリーズの発端を中心に経緯をまとめてみたが、せっかくの機会なので内容の紹介もしたいと思う。本シリーズは、社会心理学の研究を通して六つの影響力の武器を

抽出し、解説した『影響力の武器』が基礎となり、以降は、社会生活の場面で六つの原理を活用してどのようなことができるかを示す応用編と考えると大きくは外れない。『プリ・スエーション』ではさらに研究が進展し、第七の武器が登場する。ところで本シリーズで扱われる影響力は定義上、原則人と人のあいだにはたらくもので、具体的なエピソードを示すのが必然的に最もわかりやすい。そこで私自身が実際に（たまたま、そうとは知らず）影響力の武器を使ってみた体験を記そうと思う。

四年前の秋に、小社の中途採用試験に応募し、辛くも面接試験に進んだ際、面接のために来社する日時を受験者のほうから指定するよう求められた。どのタイミングで面接を受けるべきか悩みに悩んだ末、面接期間の最後の金曜日の午後を指定した。面接官が週末を楽しみにする気分と、これで面接期間も最後だという解放感が、私への対人イメージへ無意識に良い影響を及ぼすのではないかという、ほとんど願掛けに近いねらいもつてのことだったが、とにかく一次面接を通ったのでゲンを担いで二次面接も同じようにしたところ晴れて採用され、そのうちそのことも忘れていた。のちに本シリーズ

を担当することになり、原稿を読むうちに冷や汗をかいた。「例として採用面接を取りあげましょう。…(中略)

…面接を受ける順番には、採用の結果を左右する大きな影響力があります。…(中略)…最後にまわりましょう」

(安藤清志(監訳)(二〇二〇)『ポケットブック 影響力の武器』九七一―一〇〇頁)。面接順が最後の候補者が圧倒的に有利だということ、実社会の膨大なデータを用いた研究から示されていたのだ。そういえば面接で私がいかに研究から示されないで、少し危なかったと聞かされたことがある。応募者多数とも聞いていた。影響力の武器で有利な状況に立っていなかったら、結果はどうなっていたのだろうか。ところで、おそらく前述の理由によると思われるが本シリーズの原点である『影響力の武器』自体も、多くの箇所で実体験を書くというスタイルをとっている。『影響力の武器』における素材は、著者のチャルディーニ氏が、実際に訪問販売業などを体験したことからとられていることが序文に書かれている。人間は人間のエピソードから知ることが非常に強く印象に残りやすいということ自体もシリーズからの引用なのだが(安藤清志(監訳)(二〇二〇)『ポケットブック 影響力の武器』五六―六〇頁)、書

き手自身の体験から作られた言葉をふんだんに用いて書かれた書であるということは、学術書としては珍しく、本シリーズに多くの読者をひきつけている大きな要因であると考えられる。

倫理

実体験から作られた言葉で書かれているということと同様、本シリーズに欠かせない要素は「倫理」だろう。本シリーズは「影響力の武器」を行使して、他人を思いどおりに動かそう」という趣旨のものでは決していない。影響力が人間に効果を及ぼす過程は、普通の感覚では気づくことができない。そのため、知識がないと簡単に「カモ」にされてしまう(チャルディーニ氏自身が以前はカモにされやすい体質であったらしい)。そこで、影響力が効果を発揮するさまを解説し、防衛法を伝授するということが、『影響力の武器』が掲げていることであり、影響力の武器を知った読者には倫理的な姿勢が求められることがシリーズすべての書で強調されている。武器を濫用して、不当に利益を得るべきではないということである。前述

のように影響力が人間と直接関わるものだからこそ、必然的に倫理が求められるといえる。

実体験を書くことと倫理の関係で忘れられないエピソードがある。下川裕治氏の著作に以前から親しんでいる。『12万円の世界を歩く』（朝日新聞社、一九九〇）など、『影響力の武器』刊行とほぼ同時期からアジアを中心とする旅をルポタージュにしている、言わずと知れた旅行作家である。その下川氏が、二〇一九年に『ディープすぎるシルクロード中央アジアの旅』（KADOKAWA）を刊行し、刊行記念トークショーが同年四月に杉並区の書店「旅の本屋 のまど」で開催された。数時間のトークショーの終盤、最後のスライドが消され、そろそろお開きかというときに、やおら下川氏が立ち上がって「ちょっと最後にいいですか」と話し出した。著者近影などで見えていたとおりの穏やかで口数の多くない様子で、当日もどこかアジアの国から帰国したばかりだという下川氏には疲労の色が濃かったので、わざわざ氏が何かを語るために立ち上がるということ自体から、会場に軽く緊張が走った。氏が語ったのは、旅の途中で立ち寄っていた新疆ウイグル自治区で目にした状況についてだっ

た。二〇二一年に入ったあたりから、さまざまな問題がメディアによっても取りざたされているが、当時はそのような報道はほとんどなかった。下川氏は報道者ではなく、著書のタイトルからも窺えるように元々深刻な話題を強く押し出す書き手ではなかったが、われわれにそれを伝えざるを得なかったとでも形容できそうな、衝き動かされるような様子が、生々しい説得力をもって迫ってきた。書くことによる倫理的な葛藤に自覚的であるところを、書き手として信頼できると感じた。

何かに直接関わり、文章に書き起こすとき、対象への書き手の態度が明確に表れる。倫理的な視線（他者の痛みを想像すること、見たくないものでも直視しようとする）の有無が単なる「やってみた」情報と、良書を決定的に分けるもののように思える。

影響力の武器は、どれも強力に人に作用し、普段の宣伝ではどうしてもその武器の強力さにスポットを当てがちであった。そこで本稿の最後では、武器が強力であるがゆえに、必然的に求められる倫理面についても紹介した。本シリーズが倫理的な使い方を通して読者の生活をより良くする一助となることを願っている。

広報委員会

委員長 岩野忠昭

広報委員会の活動は『人文会ニュース』の発行とウェブサイトの運営が二本柱です。

ここ数年、『人文会ニュース』は年3回(8月、12月、4月)の発行をルーティンとしており、前期もこのスケジュールで発行しました。今期もそのペースを崩すことなく、まずは予定どおり3回発行することを目指します。

同誌のコンテンツである「15分で読む」「書店現場から」「図書館レポート」は、ここ数年、書店や図書館の方から好評をいただき、今期も期待に応えるべく、さらに充実した内容を揃えることを目指します。人文会の活動を広く知らせるという役割を基本に、書店や図書館の人文書担当の方に少しでも興味を持っていただき、なおかつ日常の業務に役に立つようなコンテンツを提供していきたいと考えています。

ウェブサイト(<http://www.jinbunkai.com/>)は、人文会と会員各社の情報提供の場としてさらに内容の充実を図ります。新型コロナウイルスの蔓延により一時は書店や図書館の休業、出版社の訪問営業自粛が多くなり、ウェブを使った情報発信の重要性が改めて認識されました。この流れはアフター・コロナでも変わることはないと思われまますので、有意義な情報発信ができるよう努力して参ります。

紙媒体とウェブ媒体というそれぞれの特性を活かし、かつ補完し合いながら、人文会と人文書の普及、発展を目指しますので、今期もよろしく願いいたします。

委員長 岩野忠昭(白水社)

郡司恵太(誠信書房)

副委員長 乙子 智(慶應義塾大学出版会)

三木 拓(法政大学出版局)

本橋弘行(ミネルヴァ書房)

調査・研修委員会

委員長 森 卓巳

人文会は18の出版社が集う一つの団体ですが、会員社ごと扱う書籍の特徴や対象のお客さまに違いがあるように、仕事の仕方や求められる業務も同様に異なります。

ある社にとっての当たり前のルールは、ある社にとっては新鮮な気づきであり、課題を解決するためのブレイクスルーにもなります。研修活動を通じてこうした会員社や正担当者の知見を最大活用していくとともに、外部の講師をお招きした研修や勉強会も積極的に取り組んでいきたいと考えています。

また、ここ数年間で正担当者も入れ替わり、経験や年齢の差も大きくなっています。企業において、そのような新陳代謝が健全な循環をもたらすように、会における研修活動も担当者の業務スキルや知識の向上につながります。会の一員として活動することが、常に気づきや学びの場につながる、そんな機会を沢山用意していきたいと思います。

上記のような研修活動は、新たな施策ではなく以前から続けてきた取り組みであり、会の基礎的活動でもあります。それは、書店、販売会社、図書館など、私たちが日頃よりお世話になっている方々にとって、人文会が価値のある存在であるために、時代が流れニーズが変わっても常に必要とされる団体であるための思いのほかありません。そうなるために自らを磨き続けることは必須であり、その場を提供する役割が当委員会の使命と考えています。

昨年から続くコロナ禍により、主要な活動の一つである「特約店グループ訪問」も中止を余儀なくされる状況が続いていますが、状況に変化があり再開の際には訪問先のリストアップも当委員会の大切な務めになります。マーケットの変化や調査といった準備も怠らずに活動していく所存です。

4名の委員会メンバー共々、一年間お世話になります。何卒よろしく願いいたします。

委員長 森 卓巳(青土社)

東原亮佑(勁草書房)

副委員長 澤畑 塁(東京大学出版会)

廣井一茂(筑摩書房)

荻原弘和(日本評論社)

委員会活動方針

販売・企画委員会

委員長 吉岡 聡

委員長・副委員長の交代を含め新体制となった販売・企画委員会は、諸先輩方が築いてこられた、多様な読者と学術専門書の出会いの場をつくっていくことを目標にした委員会活動を維持推進していきます。具体的には、各地の書店様へ向けた情報発信(人文書ベストセクション・今月の一押しFAX・新刊案内発送・高校生のためのブックガイド)と大小さまざまな規模とテーマでのブックフェア実施に取り組んでまいります。

なお1968年の小会創立以来初の試みとして、オンライン書店の楽天ブックス様にてブックフェアを開催し(前期からの引き継ぎ案件・本誌刊行時にはすでに終了)、大型書店の閉店・棚縮小が続くなかではありますが、新たな販路を開く足掛かりをつかむことができました。他方、昨年来、各種催事中止・オンライン化に伴い、学会・図書館展示会向けの販売方法にも変化が生じており、コロナ禍に喘ぐ今の時代に適した販売促進施策を模索し、従来のように、どう各社の刊行する書籍を届けていくかは、より大きな課題となっています。

依然として新型コロナウイルス感染症の影響が継続するなかではありますが、販売会社・書店・大学生協・図書館関係等みなさまからの現場の声に耳をすまし、随時、連携・協働していけるよう努めてまいります。今期もご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

委員長 吉岡 聡(春秋社)

佐藤信治(大月書店)

副委員長 段塚省吾(紀伊國屋書店)

福土篤太郎(晶文社)

登尾純一(平凡社)

- 「高校生のためのブックガイド2021」 2021年4月発行 13,000部
担当：紀伊國屋書店(段塚)・大月書店(佐藤)

☆4月例会

期日：2021/4/16 15:00～17:00

場所：文化信用会議室

例会・オンライン参加有り ※欠席：筑摩書房(廣井)

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換 春のグループ訪問中止、秋の研修5月末に実施か否か決定、
5月総会オン・オフ併催

○人文会ニュースNo.137号刊行

2021年4月発行

15分で読む：楠田悠貴氏(ナポレオン没後二百年、フランス革命史)

書店現場から：森暁子氏(ジュンク堂書店池袋本店)

図書館レポート：花田一郎氏(大日本印刷)

編集者が語る：『近代日本宗教史』と宗教学 水野柗平氏(春秋社)

シリーズ『日本宗教史』と人文学 石津輝真氏(吉川弘文館)

- ・担当者交代：晶文社 片桐幹夫氏退職のため福土篤太郎氏に交代。

- メトロ書店熊本本店 開店記念人文会フェア 2021/4/21～
- 笠原書店 専門書フェア 2021/5/1～
- 楽天ブックス 人文会フェア 2021/6/1～6/30

☆12月例会

期日：2020/12/18 15:00～17:30

場所：文化信用会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

○人文会ニュースNo.136号刊行

2020年12月発行

15分で読む：田野大輔氏（ホロコーストはなぜ起こったか、甲南大学教授）

書店現場から：三砂慶明氏（梅田蔦屋書店）

図書館レポート：塩谷京子氏（放送大学客員准教授）

編集者が語る：パルマケイア叢書から叢書パルマコンへ 山口泰生氏（創元社）

☆1月幹事会（例会中止）

期日：2021/1/15 16:00～17:30

場所：吉川弘文館会議室

1. 2021年例会開催方法について 他

☆2月例会

期日：2021/2/19 15:00～17:00

場所：幹事会・みすず書房会議室（オンライン参加：御茶の水書房 平石・白水社 岩野）

例会・オンライン開催 平凡社代理参加（登尾→中里）

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換 心理目録品切につき促進停止
4. 来会（オンライン）：MARUZEN&ジュンク堂書店 喜田浩資氏

●人文書ベストセレクション107号「こころの平静を保つ」2020年3月発行

☆3月例会

期日：2021/3/19 15:00～17:00

場所：幹事会・みすず書房会議室（オンライン参加：御茶の水書房 平石・白水社 岩野）

例会・オンライン開催 ※欠席：紀伊國屋書店（段塚）

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

●今井書店外商部との協業 図書館展示会への出品 担当：創元社(水口)
9/24～10/18にかけて出雲外商部、松江外商部、米子外商部、鳥取外商部にて実施。

●金高堂フェア・外商巡回 担当：創元社(水口)
・フェア期間：2020/9/19～11/15
本店 771冊 1,272,220円・朝倉ブックセンター 372冊 684,679円
・外商巡回 245冊 477,436円

☆10月例会

期日：2020/10/16 15:00～17:30

場所：文化信用会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

○会員の電子書籍の取り組みについて調査 調査・研修委員会

○2020年人文会秋季研修旅行 中止

☆11月例会・目録総会

期日：2020/11/20 13:30～14:30・15:00～17:00

場所：文化信用会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換
4. 来会(オンライン)：楽天ブックス 安川康成氏
・担当者交代：紀伊國屋書店 志田則幸氏退職のため段塚省吾氏に交代。

●15分で読むフェア「生誕250周年ヘーゲル」 2020/10より
紀伊國屋書店札幌本店・丸善丸の内本店・三省堂書店神保町本店・丸善京都本店・
ジュンク堂書店難波店・MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店にて順次開催

●三省堂書店神保町本店 人文書フェア 担当：販売・企画委員会 青土社(森)
期日：2020/11/10～2021/1/11 3,489冊 6,950,000円 昨年対比86.9%

○人文図書目録刊行会2020年総会

期日：2020/11/20 14:00～14:45

場所：文化信用会議室

○特約店グループ訪問 コロナのため中止

☆7月例会

期日：2020/7/15 14:00～16:30

場所：筑摩書房会議室 ※欠席 青土社(森)

1. 代表幹事・幹事会より
2. 各委員会活動報告
3. 来会：朝日新聞社 寺崎大氏・山田裕紀氏・矢野優子氏・浅田亨氏
・じんぶん堂説明会
・事例報告 平凡社 春秋社

☆8月例会

期日：2020/8/19 14:00～16:30

場所：文化信用会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換
4. 事例報告 創元社

○人文会ニュースNo.135号刊行

2020年8月発行

代表幹事挨拶

15分で読む：橋爪大三郎氏(九月入学はなぜ必要か、社会学者)

書店現場から：森本浩平氏(ジュンク堂書店那覇店)

図書館レポート：木下通子氏(埼玉県立浦和第一女子高等学校図書館司書)

年次総会報告、委員会活動方針など

○会員社の図書目録アンケート 調査・研修委員会

○『人文会ニュース』バックナンバーをウェブサイトで公開スタート 担当：広報委員会

☆9月例会

期日：2020/9/16 15:00～17:00

場所：ハロー貸会議室神保町

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換 秋季研修旅行について、例会開催日を第三金曜日に変更
・社会図書総目録リニューアル会議：白水社(岩野)・勁草書房(西野)・晶文社(片桐)

エ) 各委員会の構成メンバーの選任 【別室】

* 選出された幹事(代表幹事、書記、会計と3委員長)により各員の希望も考慮し、委員会の構成メンバーを選考。

以下の人事を決定。

9 2020年度の役員および各委員会メンバーの発表

- ・代表幹事 田崎 洋幸(みすず書房)
- ・会計幹事 平石 修(御茶の水書房)
- ・書記幹事 片桐 幹夫(晶文社)
- ・販売・企画委員会 ◎水口 大介(創元社) ○森 卓巳(青土社)
佐藤 信治(大月書店)・志田 則幸(紀伊國屋書店)・
郡司 恵太(誠信書房)・登尾 純一(平凡社)
- ・調査・研修委員会 ◎片山 伸治(吉川弘文館) ○西野 浩文(勁草書房)
廣井 一茂(筑摩書房)・澤畑 壘(東京大学出版会)
- ・広報委員会 ◎岩野 忠昭(白水社) ○乙子 智(慶應義塾大学出版会)
吉岡 聡(春秋社)・三木 拓(法政大学出版局)・
本橋 弘行(ミネルヴァ書房)

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

10 三役と各委員長挨拶

11 退任者、新担当者挨拶

16:30 終了

☆6月例会

期日：2020/6/17 16:30～17:00

場所：文化信用会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

○人文三目録発刊 担当：広報委員会・幹事会

2020-2021年版：2020年5月発行、10,000部(哲学)、各7,500部(心理、社会)。「哲学・思想図書総目録」は巻頭に野矢茂樹氏『シンボル化された世界、そしてシンボル化されきらぬ世界』、「心理図書総目録」「社会図書総目録」はどちらも表紙をリニューアル。

※主要店舗に対する継続展示促進により「心理図書総目録」は期中の品切となった。

○「高校生のためのブックガイド2020」2020年4月発行 18,000部

担当：青土社(森)・大月書店(佐藤)

日販図書館選書センター・TRC・書店外商部(今井書店・岩瀬書店・メトロ書店・金高堂・千葉市書店組合他)の展示会等で活用。

2020年度(2020.5～2021.4)人文会活動報告(全般)

書記幹事 水口大介

※コロナ感染拡大のため例年5月開催の総会を6月に順延

☆第53回(2019年度)人文会総会

期日：2020/6/17

場所：文化産業信用組合 中会議室(以下、文化信用会議室)

出席者：正担当者18名、誠信書房(濱田)

14:00開始

総会の開催

- 1 代表幹事挨拶
- 2 総会議長選出
* 総会議長は慣例に従い前年度の書記幹事(片桐)が務める。
- 3 2019年度活動報告
ア) 会活動全般 (書記：片桐)
イ) 会計報告 (会計：平石)
- 4 2019年度各委員会活動報告
ア) 販売・企画委員会 (委員長：朝倉)
イ) 調査・研修委員会 (委員長：水口)
ウ) 広報委員会 (委員長：岩野)
- 5 会則の改廃
* 今回は変更の申請なし
- 6 退会・休会・入会の承認・報告
・休会の報告：日本評論社
・復会の報告：誠信書房
- 7 担当者変更会員社の紹介 法政大学出版社
- 8 役員の改選および各委員会構成について
ア) 代表幹事選出
議長より田崎氏を推挙。全会員賛同にて田崎代表幹事留任を決定。
イ) 選考委員選出
出席者による2名連記投票で票数の多い上位4名を選出。
ウ) 書記幹事、会計幹事および各委員会委員長名を選出 【別室】
選出された選考委員4名と代表幹事の計5名にて協議。以下の人事を決定。
会計(平石)／書記(片桐)／販売・企画(水口)／調査・研修(片山)／
広報(岩野)

2020年度(第54回)人文会年次総会報告

書記幹事 水口大介

2020年度(第54回)の人文会年次総会は、2021年5月21日、「文化産業信用組合・会議室」において全会員者出席(オンライン参加含む)のもとに開催されました。

議事は、2020年度(2020年5月1日～2021年4月30日)の活動報告(全般)から始まり、会計報告、次いで「販売・企画」「調査・研修」「広報」の各委員会報告および質疑応答、承認と続き、新年度に向けての役員改選および各委員会所属メンバーを決定し、無事終了いたしました。

代表幹事には、全会一致で片桐幹夫氏(みすず書房)が選出(新任)されました。

会計幹事は片山伸治氏(吉川弘文館)、書記幹事は水口大介(創元社)が選出(いずれも新任)されました。委員会構成は昨年同様、「販売・企画」「調査・研修」「広報」の三委員会体制で会活動にあたることを確認しました。

各委員長(幹事)は、吉岡聡氏(春秋社)が販売・企画委員長(新任)、森卓巳氏(青土社)が調査・研修委員長(新任)、岩野忠昭氏(白水社)が広報委員長(留任)に選出されました。

また、御茶の水書房の退会と日本評論社の復会が承認されました。

なお、各委員会の構成は、巻末の「人文会名簿」をご参照ください。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2021年8月現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	佐藤 信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
紀伊國屋書店	段塚 省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3124
勁草書房	東原 亮佑	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	福士篤太郎	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房	郡司 恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青土社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創元社	水口 大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑摩書房	廣井 一茂	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	澤畑 壘	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社	荻原 弘和	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	登尾 純一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	三木 拓	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
みすず書房	片桐 幹夫	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋 弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
吉川弘文館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事

片桐幹夫

会計幹事

片山伸治

書記幹事

水口大介

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会

◎吉岡 聡 ○段塚省吾・佐藤信治・福士篤太郎・登尾純一

調査・研修委員会

◎森 卓巳 ○澤畑 壘・東原亮佑・廣井一茂・荻原弘和

広報委員会

◎岩野忠昭 ○乙子 智・郡司恵太・三木 拓・本橋弘行

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

(各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ)

「ロシア300年」の盛衰を
赤裸々に語る通史

ロマノフ朝史 1613-1918



サイモン・セバグ・モンテフィオーリ 染谷 徹訳
愛憎相半ばする一族、戦争と革命、
陰謀と謀反、弾圧と殺害、性愛と嗜
虐……王朝の絢爛たる歴史絵巻と血
にまみれた秘史を語りつくす。

●上7480円・下7920円

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 *価格税込

日本分県大地図 三訂版

平凡社編

最も大きく見渡せるよう
に縮尺と方位を設定した
47都道府県を、それぞれ見
開きでゆったり掲載。見や
すい色調で、地形や都市の
にぎわいも一目でわかる。
巻末に主要な地名約5万
項目の索引、難読地名一
覧、市町村一覧を収録。



A3変形判 ケース入り
定価 26400円(10%税込)

平凡社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29
tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587
<https://www.heibonsha.co.jp/>

『人文会ニュース』バックナンバー公開のお知らせ

1973年6月に第1号を発行した『人文会ニュース』も既に100号を超えて久しく、読者の方からは過去の記事を読みたいという希望が寄せられることも多くなりました。

また会員社の移り変わりもあり、人文会として保存しておく必要性も高まり、本会創立50周年の事業としてバックナンバーのデジタル化に取り組みました。このたび一般に向けて公開することになりましたので、是非ご利用いただければ幸いです。人文会ウェブサイト、または下記のURLから閲覧ください。



URL <http://jinbunkai.com/contents/backnumber/>

慶應義塾大学出版会
https://www.keio-up.co.jp/

ハンス・ヨナス 未来への責任

やがて来たる子どもたちのための倫理学

戸谷洋志著 アウシュヴィッツの惨禍を生きた哲学者が描く、テクノロジー時代の新たな倫理学。気鋭の若手による、ヨナス研究の新たな地平。◎2,970円

中国共産党の歴史

高橋伸夫著 壮大な理想とリアリズムの間で揺れ動いた毛沢東、鄧小平、習近平らの思想と行動、そして彼らが引き起こした歴史的事件を通じてその実像を解き明かす。◎2,970円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

コロナ時代に取り戻すべき関係性とは？
10年にわたる対話の完結篇

「あいだ」の 思想

セパレーションからリレーションへ
高橋源一郎・辻信一 著 46判・1760円

斎藤幸平氏(『人新世の「資本論」』)推薦!
脱成長、それは自然と人間が融和する未来

希望の未来への 招待状

持続可能で
公正な経済へ
マーヤ・ゲーベル 著 三崎和志ほか 訳
枝廣淳子=日本語版序文 46判・2200円

東京文京 本郷2-27 大月書店 電話03-3813-4651
otsukishoten.co.jp (税込価格)

オツカムのかみそり

最節約性と統計学の哲学
エリオット・ソーパー 著
森元良太 訳

「オツカムのかみそり」はどう使う? この有名な原理を科学や哲学で振るうための使い方マニュアル。
税込4950円

増補新装版 共生の作法

井上達夫 著
「共生の作法」としての正義
税込3300円

なぜエゴイストであつてはいけないのか? 35年後の増補論考を加え、いまあらためて「正義」に向き合う。

増補新装版 他者への自由

井上達夫 著
公共性の哲学としてのリベラリズム
税込3300円

「共生の作法」に続いて紡がれた「リベラリズム」の哲学的再生を図る「挑戦の書」。増補論考を加えた新装版。

せいそう 勁草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
https://www.keisoshobo.co.jp

E. M. シオラン
出口裕弘 訳

生誕の災厄

新装版

「どうしてこんな始末になったのだ?」

「生まれてきたからだ」

独特のユーモアと皮肉に満ちた
アフォリズム。今も痛烈に響く
異端の思想家シオランの名著を
新装刊行。
▼定価2750円

紀伊國屋書店

出版部・東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL03(6910)0519

認知症に心理学ができること

医療とケアを向上させるために

日本心理学会 監修 岩原昭彦・松井三枝・平井啓 編 アセスメント、意思決定の支援、ケアの視点、心理職の人材育成など、認知症に関連する心理学の多様な側面を論じた書。共生と予防に向けた新たな視点が得られる。2090 円

大人の発達障害の真実

診断、治療、そして認知機能リハビリテーションへ
傅田健三 著 なぜ大人になるまで障害は見落とされてきたのだろうか？大人の発達障害に悩む患者の実態と特徴、適切な診断と対応—心理教育、二次障害の治療、薬物・精神療法、リハビリテーション—の全てを網羅。2640 円

心理療法統合ハンドブック

日本心理療法統合学会 監修 杉原保史・福島哲夫 編
学会の設立メンバーによる書き下ろし。日本のこれからの心理療法の統合のあり方を示す決定版。最新理論もトピックスにて提示。3960 円

誠信書房 Tel 03-3946-5666
SEISHIN SHOBUN 東京都文京区大塚 3-20-6

ボブ・テュークスベリー

大リーグ現役メンタルスキル・コーディネーター

野球の90%はメンタル

◇日本経済新聞夕刊6/24「目利きが選ぶ3冊」



スコット・ミラー 共著
神保哲生 訳

引退後心理学の学位をとった名投手が現役時代の対戦エピソードも豊富に盛り込んで語る、心理戦とメンタルコントロール術。

1980 円(税込)

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384
○web春秋はるとあき 人気連載更新中!
<https://haruaki.shunjusha.co.jp/> ⇒

交わらないリズム

村上靖彦

出会いとすれ違いの現象学
医療・福祉の現場で人の語りに耳を傾け続けてきた現象学者が人間のうづろいゆく生を素描する。鮮やかな生のポリリズム。 2640 円

10人の皇帝たち

パリー・ストラウス

統治者からみるローマ帝国史
歴史から垣間見える人柄や、思想や哲学までも浮き彫りにしつつ、ローマの歴史の変遷を魅力的な10人の皇帝から解き明かす。 4400 円

意識はどこから生まれてくるのか

マーク・ソームス

客観的な研究と臨床からの主観的な報告の両方を対等に尊重していくという方法論によって、意識の謎を解明した注目の書。 3080 円

青土社 東京神田神保町 ☎03-3294-7829
<http://www.seidosha.co.jp/> (価格税込)

土偶を読む

130年間解かれなかった縄文神話の謎

たちまち4刷!

竹倉史人

大発見! 土偶とは、(植物&貝類をかたどった精霊像)だった! 気鋭の人類学者が日本考古学史上最大の謎の一つをスリリングに読み解く。養老孟司氏推薦! 1870 円

晶文社 〒101-0051 千代田区神田神保町1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

2021年8月25日発行 年3回発行 第138号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みすず書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

<非売品>